

ロイヤル・ウエディング A Private Function

英国放送協会(BBC)は、ウェストミンスター寺院(Link to <http://www.westminster-abbey.org/>)で4月に行われるウイリアム王子とケイト・ミドルトンのウエディングへの‘100 day countdown’ スタートを1月19日に発表しました。100日間のカウントダウン?! 私は、BBCが今後数週間、ニュースが不足すると予期しているのかと思ったぐらい行き過ぎた報道のように感じました。ただ、私は少数派でしょう。メディアで報じられていることを信じれば、ウエディング・フィーバーは英国中で始まっています。歴史上、公かつプライベートなイベントに向けて興奮が高まりつつあるのです。

ロイヤル・ウエディングに熱狂しているにも関わらず、英国人はウエディングに参列することが、実は苦手です。ウエディングで、どのように振舞えばよいか分からず、体にフィットせず似合わない礼服を着て、やや馬鹿らしく感じながら、手持ち無沙汰にぎこちなく立ちつくしているばかりです。参列者同士でハグやキスをしあうべきかも分からず、結局はどちらも失敗。社会学者ケイト・フォックスは、この居心地の悪さを、公で私的な感情を出さなくてはならないという、この上なく英国的でない立場に置かれたことよるとしています。

ただ、ロイヤル・ウエディングは、人との面倒な係わりもなく、安全で居心地のよいリビングルームのソファーから見るので安心です。実際の参列者よりも、きちんと見えますし、気ままに紅茶を楽しめて、帽子を持ち上げる必要もありません。何よりも良いことは、テレビを見ながら思ったことを好きなようにいえること。年齢や外見について攻撃したり、誰が最もグロテスクな被り物をしていたかなどと討論することを大いに楽しめるのです。

こんな英国人が、異国でのウエディングにきちんと参列できるでしょうか。私は英国人の友人が明治神宮で行った伝統的な神前結婚式に参加したことが1回あり、それはとても興味深いものでした。斎主が新郎新婦をお祓いしながら、厳かに祝詞を読んでいました。斎主が少し休みをとったとき、沈黙を打ち破るかのように、「パーティはするの?」と、花婿の3歳の甥の叫び声が…。日本のウエディングの儀式に当惑した彼は、その後、外へ連れて行かれました。

敬けんな事柄を、不敬虔によって台無しにするのは、結婚の真剣さを茶化すために使う表現でも典型的に反映されています。

‘getting married’ という表現の変わりに、私も含め英国男性はよく使うのは:、
‘getting hitched’, ‘spliced’, ‘tying the knot’, ‘doing the decent thing’

結婚後、夫が妻への呼び掛けとしては:

‘the missus’, ‘her indoors’, ‘the trouble and strife’, ‘my better half (sarcastic)’

最近では、‘Bridezilla’ (英単語 Bride と日本のゴジラ Godzilla を合わせた造語: かんしゃくを起こしたり、無理な要求をして周りをかき乱す最悪の新婦を指す) という単語を the BBC’s Learning English website で見つけました。

もちろん、これらの言葉は、4月末にロンドンで行われるロイヤル・ウエディングに関連しては聞くことはできないでしょう。少なくとも公の場では。

Written by Philip Patrick

Copyright © British Council, All right Reserved